「男、突っ走る！」

第6回

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

木内	雅也	（16）	中央高校1年2組生徒
門野	賢哉	（16）	中央高校1年2組生徒
木本	瞬	（16）	中央高校1年2組生徒
濱口	寧々	（16）	中央高校1年2組生徒
志田	悠喜	（16）	中央高校1年2組生徒
宮田	春奈	（16）	中央高校1年5組生徒
鬼頭	美彩	（16）	中央高校1年6組生徒
五十川	孝之	（16）	中央高校1年6組生徒
尾形	安代	（52）	中央高校1年2組担任
佐藤	篤	（58）	中央高校1年学年主任
稲森	亨	（57）	中央高校1年2組副担任
有賀	勇	（47）	中央高校生徒指導主任

1　中央高校・全景（朝）

2　同・1年2組教室

元気がない様子で座っている瞬――雅也が登校してくる。

雅也「おはよう」

瞬「おはよう……」

雅也「どうしたの、きのしゅん？　元気ないじゃない」

瞬「検定、落ちちゃった……」

雅也「3級？」

瞬「うん」

雅也「そっか……まあ、次の試験で再受験してみたら？」

瞬「選択式だからと思って、なめてたのかもしれない」

雅也「四つの中から正しいものを一つ選べば正解できるからね。3級の試験は比較的初心者向けで、結構ハードルが低いって言うけど、やっぱり得意不得意もあるだろうし

ね」
瞬「そうだよなぁ……」
雅也「元気出しなよ。また頑張れば良いんだから」
と、賢哉が登校してくる。
賢哉「ちっす」
雅也「おはよう。今日は、きのしゅんと一緒じゃなかったんだ」
賢哉「寝坊したから、一本後の電車に乗ったんだ」
雅也「きのしゅん、この間の検定試験落ちちゃったんだって。かどけんからも何とか言ってあげてよ」
賢哉「俺は、そもそも受験してない」
雅也「（呆れて）そうだったね。まさか、検定そっちのけで握手会行くために東京に行ったなんて、びっくりしたわ」
賢哉「俺には握手会のほうが大事なの」
雅也「そりゃ、東京へ行く交通費とか向こうでかかる費用のこと考えたら、検定の二千

円ぐらい安いって思うかもしれないけどさ、勉強だって一緒にやったじゃん。それなのに、直前になって握手会優先するから検定受けないなんて……どこまで自分のリズム突き通すんだろうね」

賢哉「それが俺なんだからしょうがないだろ」

雅也「かどけんときのしゅんって、同じようなタイプだって思ってたけど、この半年で意外とキャラが違うことに気づいてきたわ」

賢哉「今頃気付いたのかよ」

雅也「まあ、俺も含めてこうやってタイプが違う者同士だから、案外友達関係もうまく行ってるのかもね。俺までもがかどけんみたいなタイプだったら、今頃間違いなく大喧嘩してると思うよ」

瞬「それは言えてるかもね」

と、悠喜が登校してくる。

雅也「おはよう」

悠喜「おはよう」

雅也「清水、検定どうだった？」

悠喜「ちゃんと受かったよ」
賢哉「へえ、お前でも受かったのか」
悠喜「おっちゃんどうだったんだよ」
雅也「かどけんは、そもそも受けてなかったでしょ」
悠喜「（笑って）ああ、そうだったな」
雅也「（きのしゅんに）次の検定で頑張ろう。何だったら一緒に二級受けようよ。俺も一緒に勉強するから」
瞬「うん……」
と、安代が入ってくる。
安代「門田君、木本君。今すぐ生徒指導室に行きなさい」
驚いてお互いの顔を見合う雅也と悠喜。

3　同・生徒指導室
安代、稲森、佐藤、生徒指導主任・有賀勇（47　）が並んでいる――席に座っている賢哉と瞬。
有賀「門田賢哉、木本瞬。生徒指導部に申請

を行わずに無断アルバイトを行ったことに
より謹慎を言い渡す」
賢哉「……」
瞬「……」
呆れ顔の佐藤――険しい顔の安代と稲
森。

4　同・廊下

安代、稲森、佐藤が歩いている。
佐藤「これで、今月に入って無断バイトによ
る謹慎の生徒、何人目ですかね？」
安代「確か今回の門田君と木本君を含めると、
七人です」
佐藤「由々しき事態です」
稲森「そうですね」
佐藤「一年生になって半年が経過して、生徒
たちには気の緩みが出ているんでしょうね。
だから平気で学校の校則を破って無断バイ
トなんてするんです」
稲森「氷山の一角に過ぎないかもしれません

よ。他にも無断バイトしてる生徒がいる可能性だって」

佐藤「それは当然あり得るでしょうね。今回はたまたま情報がリークされたから分かったものの、しっかりと調査をすれば他にも出てくるでしょうね」

安代「調査するんですか？」

佐藤「正直あまりそんな余裕はないでしょ。しかし、また学年集会を開いて、生徒たちに忠告する必要はあるかもしれません」

安代「そうですね……」

佐藤「何か問題があるたびに学年集会を開いていますが、これも全て生徒たちのためです。規律をしっかり守ってもらわないと……高校を卒業したら、就職する生徒だっているんです。立派な大人になるためには、しっかりとルールを守る意義を考えてもらわないと。そういう人間に成長してもらうようにフォローするのも、我々教師の仕事ですからね」

安代・稲森「はい」
佐藤「今日の六時間目の総合学習の授業は、学年集会にします。この後、各クラスの先生方にも連絡しますので、よろしくお願いします」
安代「分かりました」
佐藤「では、次の授業がありますので、私はこれで」
と、去っていく――見送る安代と稲森。

5　同・職員室
安代と稲森が話している。
安代「うちのクラス、他にも無断バイトしてる生徒がいるんでしょうか？」
稲森「名乗りを上げていないだけで、いる可能性はゼロとは言い切れないでしょうね」
安代「一学期に無断バイトで謹慎になった光岡君がいたのに、うちのクラスの子たちは何も学んでいなかったんですかね」
稲森「バレなければ良いと思ってるんでしょ。

クラスの子が無断バイトで謹慎になっても、あの子たちには何にも響かないんでしょうね」

安代「他人事だと思ってるんですかね」

稲森「いや、それぞれに自分の事で精一杯になってるんじゃないですかね」

安代「あのクラスをまとめるのも楽じゃありませんね……」

稲森「尾形先生……」

大きな溜息をつく安代。

6　同・1年6組教室

美彩と孝之が、友人たちと話している。

孝之「学年集会？」

美彩「うん。今日の六時間目、総合学習の授業は中止で、学年集会を開くから体育館に行くようにって」

孝之「最近学年集会多いですよね」

美彩「今度はどこのクラスが、何やらかしたんだろうねぇ」

孝之「何か問題があるたびに、佐藤先生は学年集会開きますからね」
美彩「大好きだよね、学年集会開くの」
孝之「そうですねぇ」

7　同・廊下

体育館に移動している生徒たち――
奈々が歩いていると、春奈がやってくる。

春奈「奈々」
奈々「春奈じゃん、久しぶり」
春奈「また学年集会だね」
奈々「今回は、うちのクラスが原因だね」
春奈「何かあったの？」
奈々「無断バイトした子がいたの、うちの男子に」
春奈「はあ、それで学年集会」
奈々「無断バイトで謹慎になった生徒、うちの学年で最近増えてるでしょ。だから佐藤先生も注意喚起のために、集会開くんでし

ょ」

春奈「無断バイトの生徒を見つけるたびに集会開いてたらキリがないのにね」

奈々「しょうがないでしょ、あの先生集会大好きなんだから」

春奈「そうだね。大好きかもしれないね」

8

門田家・賢哉の部屋

賢哉が寝転がりながら、テレビで競艇実況を見ている。

9

中央高校・コンピュータ室

孝之、美彩、春奈がパソコン画面を見ながら作業をしている。

美彩「長かったね、今日の集会」

春奈「無断バイトで謹慎になる生徒が増えて、先生もピリピリしてるんでしょ」

孝之「素直に申請してれば、こんな面倒なことにはならないでしょうに」

春奈「今日、奈々から聞いたんだけど、今回

の無断バイトで謹慎になったの、二組の子らしいよ」
美彩「そうなの？」
春奈「そうやって奈々が言ってたから」
美彩「まあ、二組は男子が多いからね、そうやて無断バイトしてる子が結構いるんじゃないかな。私もバイトしようと思ってるんだけど、どうしようかなぁ」
孝之「バイト申請すれば良いじゃないですか」
美彩「その申請が面倒で、結構却下されるらしいよ」
春奈「だからみんな無断でやっちゃうんだ」
孝之「生徒指導部も、もっと寛容になれば良いのに。固く拒否するから、みんな反抗したりするんですよ。無断バイトがＮＧで謹慎にするぐらいなら、初めから許可与えてあげれば良いんですよ」
春奈「堅いからね、生徒指導部は」
美彩「そういえば、今日パンテーン来ないのかな？」

春奈「そういえば、まだ来てないね」
と、春奈の携帯電話にメール通知が来る――メールを見る春奈。
春奈「パンテーンから。『今日、部活行けないかもしれない。みんなにもそう伝えておいて』だって」
美彩「どうしたんだろう、何かあったのかな？」
孝之「さあ、どうしたんでしょう」
不安な顔の孝之。

10　門田家・賢哉の部屋
賢哉が競艇新聞を見ている――インターホンが鳴る。

11　同・玄関
ドアを開ける賢哉――立っている安代。
賢哉「何だよ？」
安代「謹慎が終わるまで、様子見に来ますね」
賢哉「ご自由にどうぞ」

安代「門田君……」
賢哉「無断バイトぐらいで謹慎なんて大袈裟なんだよ。それだったら、いじめとかしてる奴を謹慎にさせれば良いんだよ」
安代「生徒指導部に届けも出さずにバイトをしたことは、学校のルール違反なの。バイトしたければ、生徒指導部にちゃんと申請書を出さないと」
賢哉「その申請書をちゃんと受理してくれないのは生徒指導部だろ」
安代「……」
賢哉「謹慎中の課題は適当にやっとくよ」
安代「適当じゃいけません。ちゃんとやりなさい。家庭訪問は抜き打ちですからね」
賢哉「はいはい、分かったよ。じゃあな」
と、ドアを閉める――立ち尽くしている安代の顔は、疲れ切っている。

12　同・賢哉の部屋

賢哉が戻ってくる――賢哉の携帯電話

に、雅也からの着信。電話を取る賢哉。

賢哉「（電話に）何だ？　ああ、別にへこんじゃいねえよ。休みがもらえて清々してるんだ。ああ、安代が今来てたよ。抜き打ちで、謹慎中に俺の様子見に来るんだって。暇な奴だよな。もっと他の仕事しろって話だよ。それに安代なんかに来てもらうより、お前が様子見に来てくれたほうがどんなに良いか。ああ、大歓迎だよ。そのまま遊べるしな。え、生徒指導部の有馬から事情聴取されてたのか？　俺ときのしゅんのことでか？　それは悪かったな。何もお前にまで聞くことないのにな。お前もすげえな、知らないで突き通したのか。まあ、事情を知ってたら、またいろいろ聞かされそうで面倒臭せえもんな。知らないフリしてるほうが一番かもしれない。ああ、ゆっくり競艇見てる。一日中暇だから、また電話するかもしれないから、その時は付き合ってくれよな。学校に行かない間は寂しいかもし

れないけど、頑張れよ。ああ、じゃあな」
と、電話を切ると、そのままベッドに
寝転がる。

13　中央高校・全景（朝）

14　同・コンピュータ室
孝之、美彩、春奈、その他部員たちが
パソコンで作業をしている。
あくびをする春奈。

美彩「眠たいの？」

春奈「明日、模試でしょ。昨日遅くまで勉強
しちゃって。今日土曜日で休みだと思って
たら、部活あること思い出してさ。絶望的
だった」

孝之「休めば良かったじゃないですか」

春奈「検定の三級に合格したんだよ。次の二
級は、急に難易度が上がるって聞いたから
早いうちから勉強しておこうと思って。昨
日も勉強しようと思ったんだけどさ、パン

テーンは来なかったし」
美彩「昨日の休みの理由何だったんだろうね？」
孝之「さあ。木内君からは、何の連絡も来てないからね」
春奈「まあ、いずれにせよ検定勉強はちゃんとやらなきゃいけないし、模試もちゃんとやりたいし、なかなか両立難しいよね」
美彩「こんな生活があと二年近くも続くと思うと、何だかゾッとするよね」
孝之「そういうことは言わないでくださいよ」
美彩「だってそうじゃん。パンテーンは二組だから模試がないから良いけど、私たち五組と六組は進学クラスで、これから模試の回数だって増えるかもしれないでしょ。別に今の生活が嫌ってわけじゃないけど、検定とか模試に追われるだけの学校生活で良いのかなって考えちゃうんだよね」
春奈「その気持ちは、分からなくはない。せっかくの高校生活だもんね。ＪＫになった

以上は、ＪＫらしいことしたいよね」
美彩「そういうこと」
孝之「ＪＫらしいことって何ですか？」
春奈「具体的には今すぐ出てこないけど、学校生活は最低限楽しみたいじゃん。昨日みたいに学年集会でガミガミ先生に言われたり、無断バイトとか、髪を染めるなとか、ピアスの穴開けるなとか、学校のルールに縛られてたら、楽しい学校生活も窮屈になっちゃうじゃない」
孝之「それはそうですけどね……」
春奈「別に検定勉強が嫌ってわけじゃないの。こうやってみんなと一緒に勉強してる時間だって楽しいよ。でも勉強以外でも、やっぱり楽しみたいし、もっといろんな子と仲良くなりたいって思ってるの。パンテーンだって、結局ほとんどは部活でしか会ってないでしょ。クラスも違うから、普段は全然会うこともないし。ねえ、五十嵐君も何かない？　楽しいこと？」

孝之「急にそんなこと言われましてもねぇ」
春奈「まあ、とにかく私は、あっという間に過ぎちゃうかもしれない学校生活を楽しみたいって思ってるの」
孝之「なるほど」
と、雅也が入ってくる。
雅也「おはようございます」
孝之「おはようございます」
春奈「おはよう、パンテーン」
美彩「昨日どうしたの？　休むって言ってたから心配しちゃったじゃん」
雅也「ごめんごめん。昨日さ、かどけんときのしゅんが無断バイトの発覚で謹慎になっちゃってさ」
孝之「二組の無断バイトって、かどけんときのしゅんだったんだ」
雅也「そうなの。それで、俺普段、かどけんときのしゅんと一緒にいることが多いでしょ。だから、生徒指導部の有賀先生から、いつからバイトをしてたのかとか、一緒に

いることが多いからバイトをしてたことを知ってたんじゃないかとかって、いろいろ根掘り葉掘り事情聴取されてさ……それで部活来れなかったの」

孝之「それで、木内君はどんな対応したんですか？」

雅也「知らないを押し通したよ。あの有馬先生のことだからね、知ってるなんて言ったら、今度はどんなこと聞かれるか。もしかしたら、そういう事情聴取から芋づる式で他にも無断バイトしてる人の情報が、先生たちに広まっちゃう可能性もあるでしょ。面倒なことになるのが怖かったから、ひたすら知りませんって言い続けてたの。疲れちゃったよ」

美彩「大変だったね」

雅也「生徒指導室で、有賀先生と二人きりだよ。こんな地獄絵図ないよね」

春奈「パンテーンにとって、生徒指導室なんて一番縁のなさそうな部屋だもんね」

雅也「当たり前でしょ。友達のことで事情を聴かれてるだけなのにさ、何故かあの部屋に行くだけで自分も何かやっちゃったみたいな気持ちになってさ。あの部屋の空気感は、俺には耐えられないね」

春奈「何事もなくて良かったよ」

雅也「ごめんね、心配かけて」

春奈「別に。（と笑うと）パンテーンも来てくれたし、検定勉強でもしますか」

美彩「そうね」

孝之「そうしましょう」

雅也「ＯＫ、やりましょう！」

参考書を見ながら、お互いに確認をしあう雅也たち。

つづく